

## 2016東京夏季研修会講演(8月20日) 齋藤香坡先生「私の初(書)体験」(完全版)

今日は私が書に入ったきっかけ、感じたことを入れながら話したいと思います。

私の生まれは撮影所のある鎌倉市大船です。幼いころは、松竹撮影所へ行くと、美空ひばりさんの映画の撮影を盛んに行っていました。私とひばりさんは同い年です。お互い小さいので、セットの中へ入ると、向こうがびっくりした顔をする。こちらもびっくりした顔をして顔を見合わせていました。ひばりさんの母親は強い人で、いつもひばりさんの横に付いていました。幼いながらも、親が子どもを育てるといふは、ああいうものなのかなと感じていました。

私は書をやる前に、お花を習っていました。書の道に来るということは全然頭になかった。つまり、書はあまり好きではなかったのかもしれない。ところが、私が入った高校は、外の展覧会で入選すると、朝礼で生徒に賞状を授与する決まりがあったのです。それで、高校2年の終わりに書道部に入って、一度でいいから朝礼で校長先生から賞状をもらいたいと思ったのです。高3になって特選に入って賞状をもらい、次に東京都美術館の最後の学生展の出品となります。そこで卒業するまでに1回出そうと出した作品が文部大臣賞に入り、それが書の道に本格的に入るきっかけになりました。上手いから入ったのではなくて、運が強いから入ったのでしょう。易者さんに書の道か、花の道か見てもらったら、あなたは書の道へ行けと言われた。性格も書の道に行くのが良いと。そこで、お花をやめて書の道に行くことになりました。

ところが、書の道に来て感じたことは、お花の世界で学んだことと本当に似ている世界なのです。お花を習っている方は分かるかもしれません。

ところで、さきほど村越先生が書かれている姿を見ると、非常に筆の先に力が籠っていることがわかりますね。皆さんは見抜けたでしょうか。形だけを見ても駄目なのです。作品というものは、必ず書いている人の構え方、筆のどの程度のところ持っているか、どこら辺の筆管の位置を持って書いているとか、見抜かないといけません。それらをすべて見て学ばないと、自分のコントロールが出来てきません。それが線の厳しさの世界です。自分の線を作るまでの間

は、色々なことをやらないと良い作品は出来ません。書家だから良い字が書けるのではなくて、政治家でも、踊りや歌の世界にしても、苦勞に苦勞を重ねた人の作品というものは、その経験がやがて線やそれぞれの道に表れてくるのです。

村越先生の技術を、どうしても修得したい気持ちがあるのなら、相手に近づかなければなりません。神髓を得るということはそういうことなのです。今日は漠然とご覧になった方も、次の機会があったら、どういう筆を使って、どういう作品になるのかということをしっかり見てほしい。能動的な強いディテールは書きやすいけれども、(書の)深みを考えると、線筆が荒くなりがちですから、そこに「命、心」を留めながら書く、ということが大胆になりがちで、かなりの技術が必要になるでしょう。1本の線を引くにしても、時間をかけて引いていく線は、そこにどれだけの時間を使って「命」を置いていくかということなので、それが分かってくると、点一つ打つにしても、「打ちました」と、ただ「点を打った」のとでは違うことがわかります。点を書くときに「打ちましたよ」と筆を置くと、全神経が集中します。やがて、身体の一部となって意識をしなくても自然に書ける様になります。それが作品なのです。書線というのは、それが無いものはやがて消えてしまいます。

失敗と成功とは、いつも裏と表に表れます。たとえば一つの筆を使うとき、初心者は、2、3文字書くと墨がなくなるけれど、慣れてくると10文字ぐらいは書けるようになる。裏に残っている部分の墨を使えるようになるのです。筆は絶対回してはいけないという先生もいると思いますが、私の考え方は違います。自動車の運転で曲がり角は車輪が回転します。筆も知らないうちにかなり回っているのですが、慣れるにつれて、あえて曲げなくても書けるようになります。それは、心と身体が知るからです。心が知るということは、見えない世界ですから、その世界を(筆に)託していくというのが作品の作り方なのです。ただ単に書けばいい、ということはありません。書くときには必ずどんな筆を使っているのか、こういう筆はどのような線が出るのか、等々、線質は筆によって左右されますから、筆選びは大切な一歩となります。

一つのことを学ぶには、その中に飛び込んでいかない限りは、なかなか得ることはできません。芸の遊びも、書の世界も、お花も絵も同じです。私は、絵を描くときは写生をしないで、全然見ないで描く。夜中に始めると、何もないから頭の中で描いていくのです。

そうすると、昼間に描きたいと思うものに出くわすと、それに目を注ぐようになります。臨書の世界と同じなのですよ。

書画一体という世界があります。それをなぜ日本人はあまりやらないのかと思います。中国人がやっていて日本人はやらない。私も以前は絵なんてやったことがなかったのですけれど、今は没頭しています。そうすると、不思議と今まで全然気にしなかったことを気にするようになる。そういうことが一つの線につながっていくのです。だから、一の線を上手にきれいにすっと引いた人が優等生だなんて、そんなことはありえない。なかなか引けないで、上がったたり下がったりしてやっと引けた人が、やがてそこに、なんとも言えない経験と味わいを盛ってくるのです。

書を学ぶということは、まずどん底に落ちることがいいと思う。おカネの苦勞もいいでしょう。われわれが書を始めたころは、半切1反が2万7千円ぐらいで買っていたときがある。アルバイトで稼いだお金を皆つぎ込んで。今思うと、そのとき貯金していれば御殿に住めたかなあと思うのですが、皆使ってしまい、今も生活に追われています。けれどもそういう経験は、人間としての生きがいではないかな、と思います。

朝起きたら山が見えて池があって盆栽があって、という生活に憧れて、盆栽を少しずつそろえてきました。ところが数を持つと手入れが大変です。手入れで時間を取られて、うっかりすると他を枯らしてしまう。今度は、物というものは欲張ってはいけない、ということをお教わるのですね。

盆栽は密集したところに置くといけないので、風通しの良いところに置きますが、書もそうだと思う。書も字数を密集して書くと結構ごまかせる。ところが、空間的なものを書こうとすると、非常にぼろが見えてきますが、それを補うのが老巧な線質なのです。寂しさを感じさせないような書、故に、年を取ってくるとだんだん多字数から少字数に、少ないものになってきます。年のせいもありますが。字数は少なくても味わいが残る書として、なんとも言えない深みが出てくる。それが、先ほど村越先生がやっていたらっしゃった、焦らず急がずの、穂先に力が入った線質だと思います。

臨書は型を学ぶことですが、作品に使われる型となると作品化し易さがあるからでしょう、甲骨文とか、金文が多いようです。書ははたして芸術か否か、という議論がありますが、それは書が過去にこだわっているからでしょうか。ただ、古典、古典とこだわるのも、

10年、20年ぐらいなら、まあよろしいかと思いますが、30年を過ぎたら、臨書から離れて自分の作品を作らなければ人生が終わってしまいます。迷ったら初心に帰る。はじめは失敗していいのです。まず作ることです。不可能なことですが、気持ちくらは王羲之を越えるぐらいの気構えがないと己の作品は出来ません。いくら皆さんが良いものを書いても本来歴史は越えられるものではありません。本物というのは、やはりその人の歴史が作っていくものですから、越えることはできないかと思います。

だから、臨書を学ぶにしても、やはり自分が見て良いなと思うものを中心にやったほうがよろしいでしょう。産経展で臨書が出ますが、それぞれの臨書はどんなに素晴らしくても、審査員は、臨書としてよりも作品として見ているようです。それを考えると、やはり自分をどこに置いて、書いたらよいかよく考えて、ぜひ自分なりの作品づくりをしていただけたらと思います。

私は、皆さんがやらないものをやってみたいという気持ちがあります。自分流の言い方ですが、色々なものに挑戦して、どうせ最後は死んでしまうのだから、それまではやりたいことをやってみたいと、こう思っています。

最後になりますが、この間、産経の客員顧問をされている高畑常信さんという学者さんから論語のことを書いた本が送られてきました。論語を学ぶことは、非常に良いことだと思うのです。良い言葉が書いてありますので、本の一部を紹介します。

「人生は家こそ大切である。家は思い出の故郷、人生の故郷である。死んだおじいさんやおばあさん、遠く離れて住むお父さんやお母さんを思い出すこともある。優しかったな、楽しかったなと。その気持ちが人生を支えていく。親の遺産相続で兄弟げんかをしてばらばらになっても、子どものころは仲良く生活していたわけで、子どものころの思い出は楽しい」

そこで書は、やはり臨書をやらないと駄目だ、ということと同じなのです。皆ふるさとが大事だと。それは、臨書の世界を一生懸命やることとなんら変わりはないのです。

「現在は人生の基本を教えるところがない。今はお父さん、お母さんが、戦後の苦しい生活を知らない。だから子どもたちがじっと我慢できない。自分の都合が悪いことは聞こうとしない。困ってからはもう遅い。困ることを予想して困らないうちにしよう。古人は言う。良薬は口に苦いが、病気に効く。忠告は耳に逆らうが人生

を正しく導くと。人生に書くこと、新しい進歩と発見があれば、憂鬱はなくなる。年月はすぐ過ぎ去る。与えられた時間は限られている。子どももすぐ大人になる。青年も老人になる。自分で経験するより古人の言葉を聞いたほうが能率的である。しかし、昔のことを知らないといけませんが、昔の言葉にとらわれていてはいけません。人生は覚悟が大切である。新しい時代は新しい発想が必要になる。古い精神を生かしながら新しい時代に立ち向かうことが大切である。今も昔も生活することは苦しい。だから昔の人の知恵が役に立つ。良い先輩を見つけよう。良い友だちを見つけよう。無茶を言わない。無茶をしない。平凡で普通の良い結婚相手を見付けよう。

結婚というのは、大体いいですね。

そして良い親になろう。良い子どもを育てよう。みんな努力しなければならない。我慢しなければならない。楽しいことを見つけよう。人生思いきり生きよう。最後にはみんな死んでしまう。私は論語を読むための、孔子の弟子である。この本はあなたの先生である。あなたはひとりぼっちではない。人生は寂しいものだ。みんな寂しいものだ。あなただけが寂しいのではない。この本は、あなたの相談相手である」

論語の世界って、非常に面白い世界なのです。ぜひ皆さん、この論語の世界をのぞいてみて、それと同時に、書というものを、どういうものかということも、やはりもう一度かみしめてみることをお勧めします。人とうまい付き合いができるようになれば、書の道もうまくいっているのではないかと思います。私はいつも自分のことよりも、まず相手の立場の中に飛び込んで、人との付き合いをさせていただいています。